

スペイン語版では、悟りの原語は *iluminacion* である。強引に解釈すると、自己の闇の部分、つまり罪に光を当てるといことだろう。小さな罪の意識は、過去の自己の行為の所産であるから、新しい道を歩くこと、挑戦することで、自分を見つめ直す行為が巡礼ではないだろうか。

とは言っても、普通の日常生活のなかでは、自己の闇に光をあてるのは容易ではない。そこで旅という、非日常の世界に自己を置くことで、新たな物の見方ができるのでは？

コエーリョ (1987) も指摘している。

「旅に出る時は、われわれは実質的に、再生するという行為を体験している。今まで体験したことのない状況に直面し、一日一日が普段よりゆっくりと過ぎていく。・・・同時に、すべてのものが目新しいために、そのものの美しさしか見ず、生きていることに幸せを感じる。」(p. 44)

筆者が巡礼をしている時に、巡礼者に動機を尋ねたところ以下の答えが返ってきた。

自己発見 (to find myself)

自己瞑想 内省 (reflection about myself)

熟考のための空間 (space for thinking)

次の人生を考えるため

(to think of my next life)

その他、現実の世界からの逃避、という答えも多かった。でもこれも消極的な意味ではなく、新たな場・状況・空間に自分を置くことで、自己啓発を図るという、積極的な意味合いがあるのではないか。筆者は、できるだけ多くの巡礼者と話をしようと努めた。その結果、巡礼者は閉じた人々よりも、開かれた人々が圧倒的に多かったことを発見した。また、他者に対する尊敬と思いやりに満ちていたと思うし、人生に対して積極的な人々が多かったように思われる。

結局は、巡礼の動機は、マズローの言う「自己実現」の欲求ではないかと思われる。

マズローは欲求の発達を五段階に分けている (Maslow, 1943)。人間の欲求は、生理的欲求、安全欲求、所属・愛の欲求、威信・尊敬欲求、自己実現の欲求の順で発達してゆくと彼は考えた。しかもそうした欲求は階層をなしている。従って、生理的な欲求が満たされて、その後安全欲求が発達するのである。自己実現の欲求は最後の段階

に登場する。自己実現の欲求とは、自分の持っている、可能性や潜在的な能力を最大限に発揮したい、伸ばしたいという欲求である。階層をなしているわけであるから、この欲求が発達するためには、前の四つの欲求が充足されている必要がある。

マリー、フランス人、母と一緒に巡礼。年齢三十歳くらい。もっと若いかもしれないが、ヨーロッパ人の歳はよく分からない。十八歳の時に父を亡くし、後は母とべったりの生活。早いバカンスを取って巡礼にやってきた。フランスの俳優、ジャン・ギャバンを女性にしたような顔で、ちょっと肥満気味。彼女の話によると、巡礼中にみんな変わっていくそうである。会社の重役かなんかで、フランス人だったらいいが、始めは威張っていて、誰にも相手にされなかったらしい。でも巡礼中に人が変わり、次第にみんなと打ち解けたとのこと。この話を聞いて面白かったのは、巡礼中には筆者の場合にはそうしたタイプの人物に全く出会わなかったのである。自分がもし大学教授という職業に就いていなければ、会社に勤めていただろう。年齢からいって社長にはなっていないけれども、部長、重役クラスであろう。自分はその世界にいないので、推論だが、会社の中で重鎮となった人々は、どうも威張りたがるようである。「会社の中での権限の重さ、即イコール、自己の偉さ」と勘違いしているのではないかと思うのだが、社会心理学の用語で説明すれば、地位や役割が人間を一時的にせよ変えてしまっているのである。「地位による、誇大した自己像」、要するに自己の誤理解だと思っただけである。要するに、マズローの欲求階層の中で、巡礼者と一番無縁な欲求は、威信・尊敬の欲求である、ということを目指したかったのである。

「恋愛療法」という小説の中に、巡礼行動についての興味深い指摘がある。

「わたしはケルケゴールに倣い、個人の思想の発達の三段階について述べた美学段階、倫理的段階、宗教的段階—巡礼にも、それに照応する三つのタイプがあるのではないかと言った (わたしはそのことについて、巡礼路を歩きながら考えていたのだ)。美学的タイプは、愉快に時を過ごし、巡礼路の絵画的・文化的興味をそそるものを楽し